平成１９年度
中学生・高校生の国際理解・国際交流論文（高等学校の部）
最優秀賞

「世界の生活と仮面の向こう」

福島県立磐城高等学校　１年　鈴木　茜

私の伯母はフィリピン人である。６歳と３歳の二人の男の子の母でもある。私は彼女の姿を見ると、いつも文化の違いについて考える。

フィリピンの公用語は英語だ。日本の公用語はもちろん日本語だ。伯母は日本語をペラペラとまではいかないが話すことができる。しかし、時々理解しがたいこともあるようだ。分かりやすい例をあげると、日本では上着は“着る”。ズボンは“はく”。また、“はおる”や“かぶる”という表現もある。だが、英語ではこれら全てを“wear”と表現する。だから伯母はたまに子供に向かって「ズボンかぶって。」「セーターはいて。」と不思議な日本語で話しかけることがある。そんな時私の６歳の従兄弟は、「違うよママ。ズボンは“はく”だよ。」と訂正する。私はその光景を微笑ましく見ているのだが、言葉の違いというものは難しいなあ、と考えている。

語学だけではない。料理も文化の違いの一つだろう。伯母が、私達一家にフィリピン料理をごちそうしてくれたことがある。フルーツヨーグルトサラダやビーフン、ココナッツミルクを使った料理など、私が今までに食べたことのない料理が食卓に並んだ。当たり前のことだが、伯母は煮物や肉じゃがといった日本料理は作ったことがなかった。それでも私の祖母などに教わって少しずつ腕をあげているようだ。

私は、東京で暮らしている伯母のことはあまり詳しくは分からない。だが、私が知っていること以外にもたくさん、戸惑うことや分からないことなど苦労が多くあるのだろう。何しろ気候も文化もフィリピンと全く違うのだから当然だ。しかし、伯母は文化の違いというハードルを一つ一つクリアしようと前向きに頑張っている。

そんな伯母の話は私にとって、いつも発見に満ちあふれた冒険ファンタジーだ。何か一つの事柄について、「日本ではそうなんだ。フィリピンでは……。」とフィリピンと比較して教えてくれるからだ。現地の話もしてくれる。印象に残っている話は、自動車の信号機の役割を警察官が果たしていて、運転手はみんな、警察官の指示に従うということや、パーティーを開いた時、友達の友達など自分と直接関係のない人でも参加できるなどということだ。日本ではどちらもありえないことだろう。交通整理は信号機が行うし、直接の知り合いでない人がパーティーに来ることもない。だから伯母が教えてくれた、フィリピンと日本との違いには本当に驚いた。だが、何よりも驚いたのは、フィリピンの一般家庭には冷蔵庫がないということだった。日本よりも暑い国なのに、冷蔵庫がなくてどうやって生活しているのだろう……。水道は整備が進み、前よりは少し良くなってきているというが、電気の整備はまだまだ進んでおらず、停電してしまうこともしばしばあるという。冷蔵庫もないし、電子レンジもない。私達は汚れた衣類を洗濯機で洗うが、洗濯機もない。

あっても壊れていて動かない家電製品の方が多いのだという。

このような現状はフィリピンだけに限ったものではないだろう。世界には日本のように蛇口を捻れば冷たくきれいな水が、温度を調節すればお湯が出てきたり、洗濯機や冷蔵庫などの家電製品を使えたりする豊かな国がある一方で、フィリピンのように水も電気も満足に使えない、家電製品も使えない国もたくさんある。勉強や仕事、日々の忙しさで私達はつい忘れてしまいがちだが、蛇口を捻ればお湯、汚れた衣類は洗濯機へ、私達が当たり前だと思っているそんな生活が当たり前でない国も世界にはまだまだ多くあるのだ。

伯母の作ってくれたフィリピン料理を食べて、現地の生活や風習をフィリピン人である伯母の口から聞いていると、今まで遠く海の彼方にぼんやりと浮かんでいるだけだった、“ フィリピン ”という島が、国が、急に生き生きとリアリティーを持って私に語りかけてくる。ねえ、私達の現実を知っていた？、と。

日本人の何割の人がフィリピンの“ 今 ”を知っているのだろうか。おそらく、多くの人が知らないだろう。事実、私も伯母から聞くまでフィリピンの現状を全く知らなかった。恥ずかしいと思う。そんなことを言われても私達にはどうすることもできやしない。海の向こうの国のことなんて。そう考える人もいるだろう。たぶん、多くの人がそう考えるだろう。だから無関心を装って、“ 私にはどうすることもできない ”という考えに裏打ちされた“ 無関心の仮面 ”をかぶるのだ。だが、実際の状況を知っているのと知らないのとでは天と地ほどの差があると私は考えている。

自分から意識して海の向こう側の国のことを知ろうとすれば、情報というものは案外、身近なところに見つけることができる。テレビのニュース、特集、新聞あるいは本など様様なものが私達に情報を与えてくれている。

無知という名の仮面をぬいだ時、私達の行動は少しずつ良い方向へ変わっていく。そうしてその小さな行動が波紋を呼び、大きなものへと変わっていく。私達日本人が国際社会の中ですべきことは、自国のことのみならず外の世界に開けた広い視点を持って世界に接し、多くの情報を集めること、そして小さな行動を起こし、その波紋を広げていくことなのではないだろうか。

キッチンから漂ってくるココナッツミルクの甘い南国風の匂いに身を浸し、無邪気に遊ぶ小さな二人の従兄弟を見ていると、一人でも多くの人が“ 仮面 ”を捨ててくれるように願うばかりである。